

# トップセミナー「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」事業キックオフセミナー開催報告

【日時】令和元年12月16日（月）13:30-15:30

【場所】中部講堂（文教キャンパス）

【対象】一般（学内教職員・学生含む）

【参加者】550名

【プログラム】

司会：中澤紀子（長崎大学ダイバーシティ推進センター  
コーディネーター助教）

開会挨拶 河野茂（長崎大学長）

来賓挨拶 荒田孔明氏（文部科学省科学技術・学術政策局人材  
政策課人材政策推進室基礎人材推進係長）

基調講演 「男女共同参画はゴールか ツールか？」  
講師：上野千鶴子氏（東京大学名誉教授・認定NPO法  
人ウィメンズアクションネットワ  
ーク理事長）

閉会挨拶 吉田ゆり（長崎大学副学長・  
ダイバーシティ推進センター長）



## 【開催内容】

### 1. 開会挨拶

開会にあたり、河野茂学長より挨拶がありました。

本学は学生約9000人、教員約1200人を抱えており女性の採用率は約30%程度であるが、女性はライフイベントで中断されることもあり、女性の在職率等を上げることが課題となっていること、女性の在籍率、教授職を増やすための取組として、「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」という文科省補助事業の補助金を受け、女性研究者の海外派遣や英語論文作成の際の支援を行うなど研究環境を整えていると述べられました。今後はさらに全職員がダイバーシティ推進関連の学習をする機会を増やすことを計画している、と締めくくられました。

### 2. 来賓挨拶

文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課人材政策推進室基礎人材推進係長 荒田孔明氏より来賓挨拶をいただきました。冒頭に我が国が本格的な人口減少に向かう中で、社会の活力の維持向上を図るうえで、女性が最大限能力を活かせる環境をつくっていくことが必要になってくることを述べられ、女性研究者数及び女性研究者割合の推移と国際比較、日本の大学における女性教員採用割合が目標値に比べて低いこと等をご説明いただきました。また「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業」や全国ダイバーシティネットワーク構築の取組、今後の国の方針や取組なども話されました。



### 3. 基調講演

認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク理事長上野千鶴子氏に「男女共同参画はゴールか ツールか？」と題してご講演をいただきました。

まず今年話題となった上野氏の東大祝辞に関して言及され、どうして東大は女子入学者が増えないのか、それは同じきょうだい間でも男女によって親の投資が異なっているからであるということを描かれ、これまでの日本の社会においては、男女に対する格差のある扱いが、当人も気が付かないまま行われてきたということをお話されました。本学への進学者データも用い、分析をされ、長崎大学の女子学生県内進

学者比率が、男女全体の県内進学者比率よりも高いことについて、女子を親の手元に置いておきたいという考えが未だ残っているのではないかと指摘されました。その後、諸外国は女子学生の方が男子学生より進学率が高いのに日本は女子学生の進学率が低いと話されました。また日本社会全体の女性の雇用を取り巻く背景や現状として、現在の女性を取り巻く環境の弱点を指摘され、日本の女性の地位が下がり続けている主たる要因は女性が非正規雇用であること、また女性が働き続けることができないことについては、研究者の共通認識として日本型雇用（終身雇用、年功序列給与体系、企業内組合）を挙げられました。企業が変えることは難しく、変えることは見込めない、しかしながらその処方箋はあると述べられ、長時間労働の廃止、年功序列の廃止、同一労働同一賃金の確立の3点や雇用の柔軟化を指摘されました。

更に大学における女性の学生、院生、教員、教授の比率について、女性研究者はマイノリティで弱者であるという現状、またポジティブアクションは有効な方策であり、人事の透明性・公正性を高めることで女性採用比率は高まるであろうと述べられました。



演題の「男女共同参画はゴールか ツールか」についてはその解の可能性として社会的公正、効率性、社会変革の3つを挙げられ、特に女は弱者という経験を背負い寄り添って生きてきた、また他者へのケアを通して権力の行使に打ち勝ってきた経験があり、これからの超高齢化社会に女性が果たす役目の可能性を述べられました。これから生きていく若者へのメッセージとして、ますます予測不可能性が高くなる世の中で知を生み出す能力、能力を調達する能力を身につけて欲しい、情報付加価値生産性の高い人間になってほしいと話されました。

最後に本講演会がダイバーシティ推進センターの主催ということで女性を活用することの利点（女性は言語習得コストがない、高学歴で優秀、文化や慣習に習熟している、マルチタスクをこなせる等）を述べられ、人間のために社会があり社会のために人間があるのではない、企業も現状維持だけならこのままでよいのかもしれないが、生き延びるためには変わらないといけない。女を増やして、安心して弱者になれる社会を作りたい、そしてあらゆる分野に女性が参入して自分たちの進む方向を決めて欲しい、と述べられました。

上野氏のご好意で質疑応答の時間を設けました。幅広い年齢層から多数の挙手があり、上野氏にはそれぞれに対して丁寧にお答えいただきました。会場は熱気にあふれ、時に笑いもあり、和やかな雰囲気での講演会となりました。

#### 4. 閉会挨拶

最後に、吉田ゆりセンター長より挨拶がありました。上野氏から、働く・生きるということはどういうことか考え直す必要があるということをご提示いただいた、女性教員増加に対する私たちの取組に対しては、女を増やしてどうするんだ、という声に対して考えながら動いてきたが、今日は一つの解をご提示していただいたように思うと話されました。

また、採択された「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業(先端型)」を十分に活用し、長崎大学を誰もが働きやすい職場にしていきたい、また本学での取組を長崎のまちにも発信していきたい、と述べました。

本講座には、多くの皆様にお集まりいただきました。参加者アンケートには以下の通り、たくさんのご感想をご記入いただきました。

- ・地域に開かれた大学として、これからも一般参加の催しを発信していただければ嬉しいです。
- ・期待していた通りの講演でした。弱者が弱者のまま尊重される社会になるよう、男性を巻き込んでい



きたいと改めて強く思いました。ありがとうございました。「非暴力」は学べるもの。男性を少しずつ少しずつ変えていきます。その分、私が成長（経験と学習を積む）することが大切！ためになりました。

- 子育て、ケアに焦点をあてた内容で終えてくださってとても良かったと思います。このような機会を企画していただきありがとうございました。保守的な長崎の土地を改革していく機会を、もっと大学が変われば地域も変わるのでは。
- 長崎大学がやっていくことで、「長崎」がもっと、いろんな意味でいいところになっていくように、「見本」となり、「先導者」となり、また最後の質問の学生のような、より良い「教育」をやっていけるように頑張してほしい。
- 興味深い言葉がたくさんでした。保育所に勤めていますが、私・私たちも意識を持ち、周りの人間に差別の再生産をしないようにしたいです。学び続けたいです。
- 男尊女卑の傾向が大きい九州圏の長崎大学で、このような講座を開いていただけて、大変有難く思います。セクハラのおくだりで笑いが起こる現状では、まだまだ先は長いように感じました。
- 現役の時に聞けばよかったなあと思います。職場にも恵まれていましたので、現在よりも働きやすかったと思っていますが、この講演を聞いてもっと違う働き方や生き方ができたのではと残念な気持ちです。
- 就活中ですが、今日の話はとても恐ろしいものでした。これまで直接的な女性差別を受けた経験がありません（気づいていないだけかもしれませんが…）。女性差別が当たり前の社会におかしいと思うことを忘れずに生きていこうと思います。
- 長崎大学での交換留学生です。日本に来る前に、上野先生の東大祝辞について勉強になりましたが、留学しているうちに、先生の講座をお聴きできることは思わなかったです。大変有難いです。中国でも、今は男女差別をなくしたり、女性の力を活かしたりする傾向が見られますので、若い世代からその問題について認識し、考えなければならないと思います。
- 学部生の時に、女性学やジェンダー論のことについて少し勉強していました。私たちが発する言葉や思考様式等、様々な要因が絡み合っ、私たちの行動に影響を及ぼして、さらには次の世代にまで受け継がれていくことに、(現在教職大学院の学生ですが)生徒に正しい認識を伝えていかねばと思ったところです。普段の自分の言動等を見直すきっかけにしていければと思います。多様性という観点をもっと深く知りたいと思いました。
- 現在の学長さんのもと、社会学系の講義が聞けるとは意外でした。とても意義のあるものだったと思います。長崎大学は地元、他九州の学生も多く、女子学生には家に縛られている日が多いように感じていました(在学時)。ただ、社会にでもあまりにも悪意のない差別・言葉にあてられたことを思い出しました。
- 男女共同参画・ダイバーシティなどと口にする、男の人を敵視しているようなイメージを持たれることが多く、また地域的な慣習もあり、男女共同参画を声高に言わない、言えない雰囲気があります。私はもっともっとしっかり学び、冷静に男女ともに尊重され続ける、尊重し合うことのできる社会を構築するために発信できるよう、一步一步前に進みたいと思います。・女性学をやられている方の講演で、このような意見は場違いなのかもしれませんが、学問として男女を気にしている限り、本当の男女均等、人間の安全保障を考えた社会形成は困難なのではないかとも思いました。もちろん、不公平が是正されるまでは戦いが必要なのですが、終着点として女性学がなくなればいいなと思いました。

